【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和５年度学校評価 結果・学校関係者評価

様式1（小・中）

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	佐賀市立本庄小学校

1　前年度 評価結果の概要	・授業改善に取り組み，D-OODAループの考えを取り入れて日々の教育実践を行うことができたが，児童の学力としてその成果が表れない部分もあった。 ・特別支援教育に対する職員の理解や実践は進んできている。すべての子供たちのためにユニバーサルデザインの考え方をさらに推進していく必要がある。 ・コミュニティスクールのよさを十分に生かせなかった今年度の課題を踏まえながら「地域とともにある学校」の実現を目指したい。
2　学校教育目標	自ら学び（知）、豊かな心をもち（徳）、たくましく生きる（体） 本庄っ子の育成 ～「感動・感謝・思いやり」があふれる学校に～
3　本年度の重点目標	①　研究主題「学び続ける学校」を意識しながら，主体的に学習に取り組む態度の育成と学力の向上を目指してさらに授業改善を推進していく。 ②　すべての教育活動・すべての児童に目を向け，UDの考えを生かして個に応じた指導・支援の在り方を探り，合理的配慮の充実を図っていく。 ③　「地域とともにある学校」の実現に向け，コミュニティスクールとして学校教育活動の活性化と職員の意識の向上を図る。

4　重点取組内容・成果指標　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践	○学力向上対策評価シートに示した共通実践に取り組み，その成果指標を達成した教師90%以上	・学年経営指針、学級経営指針、業績評価表、学力向上対策評価シートに示した共通実践の整合性と一貫性を取り、定期的な学年部会で取り組み状況を確認し、客観的な評価を入れながら改善していく。	B	・共通実践に取り組んだと回答した教師が82%だった。 ・課題であった書く力については，それぞれが授業時間や宿題等を活用しながら取り組むことができた。 ・学力向上に向けた共通理解の場を設け，今後の方向性を学年で確認することができた。	B	・「学び続ける学校」のテーマのもと、実践されている。教師も子供も共に学び続ける意欲が感じられる。 ・教師間で共通認識をし、推進されている。
	○全職員による教科等指導力及び学級経営力向上に係る研修会の実施	○研究部提案研修を通して自身の授業力や学級経営力などの長所や課題などを自覚し改善に生かすことができる教師が90%以上	・授業力向上授業を全員実施する。 ・授業力に関するチェックシートから重点項目を決め、自分の授業力について振り返る。 ・D-OODAループを取り入れ、指針に向かって、具体的手立てを取り入れ、実践する。	B	・授業力向上研究会を日々の授業に生かすことができたと回答した教師が79%だった。 ・学年部会でD-OODAループを基に共通理解を図ることができた。また，一人一人がD-OODAループを基に1年間の歩みをライフストーリーにまとめて振り返ったことで，自身の手立てや指針を更新させることにつながった。	B	・D-OODAループの導入により、学年部会での振り返りを行うことで、具体的な取組になったと考える。 ・中間評価から低下した要因を探り、達成に向けた具体策を考えていってほしい。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートで、肯定的な回答80%以上を目指す。 ○自分や友達のよさを見つめる時間を学期に1回以上設定し、自他を認め相手を思いやる心や所属する集団や地域を大切にしようとする心を育む。	道徳の授業づくりについて全職員で考える場を設ける。 ・自他の良さについて振り返る場を設定し、その記述を授業に生かす。 ・授業と日常生活を意識して関連付ける。	A	・道徳に関するアンケートで肯定的に回答した教師が90%だった。道徳授業と日常生活、行事を往還させながら子供の言動を言葉かけや通信、掲示物等で価値づけることができていた。各クラスでの取り組みを通して、自他の良さに気付こうとしたり頑張りを認めようとする子供が増えたと実感している。また、99%の保護者が学校の取り組みを評価している。児童アンケートの結果によると、道徳に関するどの項目においても、約90%の子供が肯定的な回答をしている。	A	・道徳の授業での学びを日々の生活に往還させる取組で、児童の心を育むことができている。 ・すべての教師が肯定的な回答となる、さらに考える場を設けてほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的対応ができていると回答した教員90%以上 ○いじめやいじめにつながる行為の有無について、職員間で共通理解を行う場を月１回以上設ける。	・アンケート調査を行い、いじめ等問題の早期発見を行う。 ・いじめの覚知・認知に関する対応マニュアルをもとに、問題が発生したときの即時対応を行う。	B	・12月のアンケートよりいじめ防止等について組織的対応ができていると回答した教員90%以上 ・今年度より、月1回の教育相談全体会で心のアンケートをもとに学年で共有する時間を取ったことで気になる児童の把握や早期対応などにつながり、職員みんなでいじめへの対応や困り感を持っている児童への関わりに意識を高めることができた。	A	・いじめ防止について、教師間で共通理解し、対応されている努力が見られる。 ・今後も早期発見、早期対応といった組織的対応の継続をお願いしたい。
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒70%以上	・学年、学級、委員会、クラブ等様々な集団での活動を設定し、児童一人一人を多くの職員で見守る体制をつくる。また、生徒指導協議会等で児童の情報を共有し，共通理解の上で指導できるようにする。 ・様々な年齢や職業等の人々との出会いを通して、学年や学期の初めに一人一人が目標やなりたい姿を設定し、それを基に現在の自分を振り返り、成長を実感することができる機会を設ける。	A	・児童アンケート「先生はあなたの話をよくきいていくれますか」で肯定的な回答をした児童が95%いた。生徒指導協議会等様々な場で児童の情報を共有することで、学級担任だけでなく、学年、特別支援学級、級外職員などが連携して見守る体制ができている。 ・児童アンケート「将来の夢やこれからのめあてなどがありますか」で肯定的な回答をした児童が92%いた。各学年で、目標やなりたい姿の設定、成長を実感できる機会を取り入れている。「本庄感謝祭り」など地域人材等とつながりながら価値観を広げていくことができるようにしている。	A	・先生方が話をよく聞いてくれることで、児童の自己肯定感が育っている。先生方の協力体制が素晴らしい。 ・地域とのつながりが児童の成長に貢献できているようだ。、「本庄感謝まつり」の実施が好影響を与えているようだ。
●健康・体つくり	●「運動習慣の改善や定着化」 ●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童生徒65%以上 ●「健康に良い食事をしている」児童生徒80%以上	・日々の体育の学習を充実することができるように、ワークシートや場の共有などを行っていく。また運動委員会を中心として校内へ運動遊びや佐賀県で行われているスポーツチャレンジの紹介を行い，運動遊びを奨励していく。また家庭に対して親子でできる運動遊びなどを紹介し，家庭内の交流を通して、運動する機会を増やすことをねらう。 ・給食だより等の発行や、食育月間を中心とした健康チャレンジカードとアンケートの実施により、家庭への啓発と望ましい食習慣の定着を図る。毎日の給食時間の食に関する指導を充実させ、食への興味や関心を高める。	A	・2月に各学年1クラスを抽出して行った運動時間に関する調査によると78%の児童が1週間で420分以上運動に取り組むことができており，当初の目標を達成することができた。校内における体育授業の中で，前期に比べ児童がワークシートを使用したり，場を工夫されたりと教師による試行錯誤が見られるようになった。また各担任から授業の様子などを学級通信などを通して知らせたり、生活チャレンジカードを活用を通して親子で1週間の中でどの程度運動することができていたのかを可視化たりできたことが達成できた要因だと考えられる。 ・「健康に良い食事をしている児童」は81.5%であった。全校での生活チャレンジ週間の実施、参観日での保護者参加型の食育授業の実施、各種便りの発行等により、児童と家庭へ向けて望ましい食習慣について啓発した。毎日の給食時間に電子黒板での食育資料の活用を全学級で実施し、児童の食への関心を高める取り組みができた。	A	・家庭との連携を取りながら推進していくことになるため、保護者アンケートの結果を活用しながら、協力や啓発につながればよいと思う。 ・学校をあげて食育に取り組まれていることで、児童が自分の食習慣を見直す機会となっている。今後も保護者を巻き込んだ食育の推進を図ってほしい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校時間の上限を遵守する。	・退勤目標時刻を設定し、放課後の時間を効率的に使って業務にあたることを意識する。 ・「例年通り」を見直し、分掌事務等の内容の変更や削減につなげる。	C	・「1か月・1年間の上限を超えないように意識してして業務している」が概ねできていると答えた職員は47%であった。研究の大詰めを迎え、原稿や授業計画の作成などに向き合う中で上限時間を超えてしまった職員が多かったことが要因である。	B	・勤務にメリハリをつけて健康管理に十分留意してほしい。 ・研究校ということもあり大変だとは思うが、より一層の業務改善を進めてほしい。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
○特別支援教育の充実	○全職員による授業や教室環境等のユニバーサルデザイン化の取り組み。 ○合理的配慮の基、個に応じた指導・支援を行う。	○学級や児童の実態を踏まえ、UD化を意識し、学びやすく過ごしやすい授業や環境づくりを行ったと回答する教員90%以上。 ○配慮を要する児童について、保護者・職員・関係機関等と連携を図りながら、よりよい支援の在り方や具体的な支援方法を探ることができたと回答する教員90%以上。	・子供に寄り添ったUD化を行うことができるようにお互いの授業を参観して意見交換をしながら，専門的知識や個に応じた指導についての理解を深める。 ・個別の支援計画の評価・修正を行い，個に応じた支援や学校全体の指導等の方向性を共有し連携しながら指導・支援を行う。	A	・UD化を意識して授業を行ったり、教室環境を整備したりすることができたと回答した教員は89%であった。次年度は、授業のUD化や校内・教室環境の整備をさらに進めていきたい。・配慮を要する児童について，保護者、職員、関係機関等と情報交換しし具体的な支援を探ることができたと回答した教員は97%であった。ほとんどの教員が児童の実態に応じた具体的な支援をすることができた。	A	・どの学級でもUDを意識した環境作りができており、一人一人に寄り添う支援も随所で見られた。 ・UDは、配慮を要する児童ばかりでなく全児童を対象に進めるものであることから、更なる向上を目指し継続してもらいたい。
○生徒指導の充実	○全職員による、児童理解をもとに「自己指導能力」の獲得を目指した教育活動。	○「児童の背景を理解し、生活における課題を把握し改善したり予防したりするための指導に努めている。」と答える教員の割合を90%以上にする。 ○QUを活用し「全体集団成立期」まで高めることができたという実感できた教師を80%以上にする。	・D-OODAループを活用しながら、日々の教育実践を振り返り、児童理解や教育観の更新を図る研修を行う。 ・「自分から」「思いやり」を合言葉に職員が情報を共有し、自己指導能力の獲得を目指す。	B	・「児童の背景を理解し、生活における課題を把握し改善したり予防したりするための指導に努めている。」と答える教員の割合を83%であった。 ・QUを活用し「全体集団成立期」まで高めることができたという実感できた教師を93%であった。	B	・先生方と子供たちとの良好な関係が築けていると思う。 ・中には、困ったことが言えない子供もいるので、大変だと思うが、今後も困っている子供に寄り添う関りをお願いしたい。

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・全職員で、共通実践として授業力向上研修会、授業研究会を通して、授業改善に取り組んできたことで、教師自身が自身に指導を振り返り、次の実践に移すといったサイクルが定着してきた。また、今年度から「本庄検定」として、児童自身が目標を設定し学ぶ機会の創出も試みた。学習状況調査では，４～6年生の算数科に大きな課題がある。引き続き学力向上の取組の重点化を図る必要がある。 ・特別支援教育に関する情報交換を定期的に行ったことが、教職員の共通認識の創出につながった。支援を必要とする児童が各学級に在籍していることから、研修等を等して、なお一層教職員の資質向上を図っていきたい。 ・校時の見直しによる成果は見られたものの、更なる業務改善が喫緊の課題である。教育実習や研究発表の在り方を再度見直し、より効率的な働き方を目指す必要がある。